渡辺章悟先生を送る

渡辺章悟先生は本年三月をもって東洋大学を定年退職される。この機会にあとに残る学科教員を代表して、これまでの多方面におよぶご活躍を紹介し、先生を送る言葉に代えたいと思う。

先生は群馬県立高崎高等学校から法政大学文学哲学科を一九七七年にご卒業後、さらに東洋大学大学院に進んで仏教学を学ばれた。その後、東方研究会やデリー大学の研究員を経て、一九九五年四月より今日に至るまで東洋大学文学部に奉職されたのである。その間に学科の名称は印度哲学→インド哲学→東洋思想文化学、大学院の専攻も仏教学→インド哲学仏教学と変遷したが、先生は変わることなく本学の仏教学とインド学を支えて来られた。ご自身の研究成果は二〇点を超える編著書と八〇数点の学術論文として結実したが、特に専門的に取り組まれたのは般若経典の原典研究である。それは博士学位論文である『金剛般若経の研究』として世に現れたし、学界に一大センセーションを巻き起こした所謂「スコイエン写本」の共同研究にも参画され、大乗仏教の原初形態を明らかにされたのである。質量ともに豊かなご業績はインド仏教から日本の山岳信仰にまで及び、さらには本学の学祖である井上円了に関する論考や一般読書人のための啓蒙書をも含んでいる。

教育者としての先生は東洋大学の仏教学を常に正しい方向に導かれた。学部教育では一貫して「仏教思想」の概論的科目を担当して初学者に仏教の姿をわかりやすく説かれた。門下には国内外から優れた研究者が集ったが、それは多くの大学院生を指導して博士学位の取得にまで導かれたことによって明らかであるし、東京大学、早稲田大学、大正大学、国際仏教学大学院大学等の他大学でもでも教鞭をふるわれた。先生のご指導を仰ぐために東洋大学

を研究拠点とした研究者も少なからず、その謦咳に接した者はまことに多数に上る。

このように精力的な教育・研究活動に対して、学界は「日本印度学仏教学会鈴木学術財団特別賞」「中村元東方学術賞」という再度の褒章でこれに報いた。前者は先生の博士学位論文である『金剛般若経の研究』に対するものであり、後者は大乗仏教全般に及ぶ業績を対象としたものである。

ご自身の学問を究めるだけではなく、先生は関連学会の役員として仏教学とインド学の発展に寄与しておられる。なかでも最大の全国組織である日本印度学仏教学会の常務委員、理事、評議員、企画編集員を通算一〇年以上にわたって務められた。今日われわれが研究を安心して続けられるのは先生のご尽力によるところが大きいのである。

研究者として、そして教育者としての斯界おける多大なご貢献の他、大学運営においても先生は、在職中に学科長（学科主任）、大学院専攻長、附置東洋学研究所長の重責を担われた。責任感に溢れるお仕事ぶりは人のよく知るところだが、ユーモアとウイットに富んだご発言が、どれほどその場の空気を和ませたことであろうか。

最後に話がいささか個人的なことに及ぶことをお許しいただきたいのだが、私が東洋大学に赴任したばかりの頃、学科教員で温泉旅行にでかけたことがある。その折にお邪魔した先生のご実家は創建以来五〇〇余年の曹洞宗仁叟寺であった。多数の文化財には自治体による調査が入り、多くの堂宇が立ち並ぶ名刹であるが、私はそこで生まれて初めてタケノコ掘りを体験したのである。境内に竹林を抱えるほどに広々と自然豊かな環境で幼少期を過ごされた先生は、何よりも花を愛しておられる。学務と雑事に多忙な日々から解放される先生は、今後もますます学問一筋に進まれるに違いないが、私達もさらなる学恩を受けることを願う一方で、先生がゆっくりと花を愛でる時間の多からんことを祈るばかりである。

第一部学科長　沼田一郎